

書評

井村君江著
『日夏耿之介の世界』

国書刊行会 2015年

富士川 義之

黄眼草堂主人こと、日夏耿之介（1890-1971）の名前を知る人は今日少ない。彼の読者にいたってはほとんど稀有と言ってもよいだろう。大正から昭和初めにかけて『転身の頌』や『黒衣聖母』の学匠詩人として知られたのち、ポーやワイルドなどのデカダンス文学の翻訳、西欧の鍊金術、神秘主義やオカルト思想、『明治大正詩史』や『日本象徴詩の研究』や博士論文『美の司祭』（キーツのオード研究）などの学術的研究のほか、夥しい数にのぼる文芸評論や隨筆をものにし全集8巻が出ている文学史に残る文人であるのに、現在は瀧澤龍彦や種村季弘のいわば先駆的存在としてたまに言及されることがあるにすぎない。残念なことである。

それゆえ日夏耿之介について書かれた本を読みたいと思っても長い間できなかつたのだが、このたび刊行された井村君江『日夏耿之介の世界』はその欠落を埋めてくれるまさにうってつけの著者による待望の書である。まことに慶賀すべきことと言わなくてはならない。

井村氏は青山学院大学の大学院生の頃に日夏と初めて出会い、彼の学識と人柄に魅せられて弟子入りし、以後死別するまで17年にわたり親交があった。気難しい老詩人も若い井村氏には気を許すことが時折あったようでなれば秘書代わりのようにして可愛がっていたらしい。日夏は本名樋口國登名で比較文学の講義を担当したが、選ばれた三名のみが阿佐ヶ谷の自宅書斎での講義に出ることを許された。選に漏れた者たちは涙を流して悔しがったという。人気教授だったのである。

私たちの前に現れた日夏先生は、羽織袴の瀟洒な和服姿、白足袋に草

履、黒縁眼鏡、整った高貴な顔つきの、いかにも「学匠詩人」といった方であり、話しぶりにも魅力があった。大学へは車で送迎されていたが、外に出るときはこの上にインバネスの黒いマントを羽織り、黒ソフト帽をかぶって茶色のマフラーをつけ、黄皮に漆で虎の絵の描かれた手提げをさげておられた。この中には薬と称したウイスキーの小瓶と煙草が入っている。この姿で一緒に「銀ブラ」できるとは思ってもみなかった。「ここでいいよ、降ろしておくれよ」と、運転手に言い外に出て、家への帰り道をご一緒に銀座を散歩したのである。

和服姿で講義をするダンディーな大学教授というのは今では大変珍しいだろうが、評者が大学生の時分にもまだ時々見かけることがあった。和服姿のフランス文学者河盛好蔵のフローベール講義を聴講したこともある。振りかえってみると、よくも悪くも、いかにものんびりした太平楽な時代であったと思う。そんな時代に日夏耿之介と出会い、厳しい薰陶を受けた井村氏の、個人的な回想をふんだんにまじえた研究書であるゆえに、この詩人・英文学者に関心をもつ読者には貴重な観察や資料としても裨益するところが多いのではないかと思われる。

本書は序章「日夏耿之介先生との思い出」、第一章「日夏耿之介に関する評論」、第二章「日夏耿之介に関する隨筆」、第三章「日夏耿之介の周囲の人たち」、第四章「日夏耿之介年譜」で構成されている。日夏耿之介は生前から特異な近代詩人として知られていた。とりわけあまり見慣れぬ難解な漢語や雅語、それに廢語や死語をさえ敢えて使うことを厭わぬ晦渋な詩人というイメージがつねに先行して北原白秋や萩原朔太郎や堀口大學ほどには一般読者にあまり恵まれなかつた。このような晦渋な詩的言語を駆使する日夏のもくろみは、近代詩人としての在り方を、生来の超自然嗜好も相俟つて、ヨーロッパ象徴主義とオカルティズムの相關性を掴み取ることに求め、反日常的な思惟や想念の小宇宙を現前させようとする彼の詩学と深いところで結びついていた。日本にヨーロッパ風の象徴詩を誕生させるという極めて困難な企てに熱中していた若き日夏ほどに、その人の感性や思想のなかにオカルティズムが深く根をおろしていた詩人はほかにいないと言つてよい。早くからポーを介してボードレールに親しみ、ダヌンチオやワイルドに傾倒し、ロマン主義から世紀末唯美主義やデカダンス芸術に共感するあまり、日本象徴主義の詩学の実現ということを目指していたこの学匠詩人は、その詩的世界像の成立根拠をオカルティズムに求めていたのである。

日夏の代表的なオカルト本には『吸血妖魅考』や『サバト恵異帖』(共にちくま学

芸文庫)があるが、これらは西歐オカルティズムやデモノロジーに関する膨大な文献を博搜したこの学匠ならではの怪異趣味を如実に反映させた奇書である。評者も若年の頃に愛読したものだ。今から見ると、魔術、呪術、鍊金術、心靈術、薔薇十字会など、近代ヨーロッパ文学における地下水脈ともいるべきオカルティズムの伝統に幅広く精通していた日夏の先駆的な優れた業績があるおかげで、瀧澤龍彦も種村季弘も由良君美も随分と仕事を進めやすかった局面があったのではなかろうか。本書は日夏の詩的世界を解き明かす論文を幾つか収めているが、いずれにも共通するのは、日夏を他の日本の近代詩人と決定的にわかつ点は「生の旅路の終りを自覚することが、翻って刹那の靈感を詩の裡へ意識的に定着させる試みを意味しており、それによっておのれの世界を永遠なる芸術の本質へ向って開示させようと意図した点にあろう」とする視座である。その点で日夏を、象徴詩の大家マラルメが実現した「純一不二」詩的世界を日本語で達成しようとする神秘主義的な近代詩人として捉えるのである。とはいへ、そもそも日夏の詩はマラルメ詩の深淵性や虚無感や絶対性への希求をその根元にそなえたものであるのかどうか、いささか違和感を覚えざるを得ない。これは日夏の詩の根源にかかる問題として論議を呼ぶところであろう。

日夏は若いときから晩年まで一貫してワイルドに強い興味をもっていた。そのことは『ワイルド全詩』(講談社文芸文庫)からも知られるが、井村氏にとっても評者にとって最も魅惑的なのは、やはり日夏のサロメの翻訳『院曲撒羅米』である。初出は昭和三年で、単行本が同十三年に出て以来、日夏は二十七年に角川文庫に収録された後も最晩年まで數度に亘って大幅に朱を入れていた。思えば、二十二歳の大学生時代に、自ら選んで『サロメ』の訳筆を始めてから、生涯この戯曲の翻訳にかかわっていたのである。日夏にとって『サロメ』はまさに「運命の書」であったのだ。試みに日夏訳を少しだけあげておく。

サロメ公女 そなたの髪の毛は恐ろしい。泥だらけぢや。塵だらけぢや。
 蛇のむれのやうにそなたの頸のまはりにとぐろを巻いている。わたしはそなたの髪の毛は好かぬ。約翰よ、わたしが見めているのはそなたの脣ぢや。そなたの脣は象牙の塔の上にある猩々縄の紐のやうぢや。象牙の小刀で二つに切つた柘榴の實のやうぢや。推羅の巵の花園に咲く柘榴の花は薔薇の花よりも紅いけれど、そなたの脣のやうに縫くはない。国王の臨御を知らせる菰の紅い音色は敵を顰へ慄かせるけれども、そなたの脣ほどに縫くはない。そなたの脣は酒樽のなかで葡萄を賤んでいる造酒師の足

よりも絳い。聖院に巣をくうては上人さまだちに餌を飼はれている鶴の足
 よりも絳い。森林の中から獅子を殺し、金色の大蟲を見て現はれ出た男子
 の足よりも絳い。大海の幽暗のなかより目付けいだして、漁人が王者の
 貢物とする朱珊瑚の枝のやうに絳い。

ここで日夏が極めて独自の語法、つまり「あかい」というのに「紅い」「絳い」という語を使いわけたり、「蛇」に「くちなは」、「造酒師」に「とうじ」などというよう、漢字に大和言葉のルビをふったりするといふいわゆる「黄金均衡」の語法を使用しているのは、何よりも視覚的に訴えるロマン派的なレーゼドラマの戯曲として読まれることを意図していたからであろう。日夏訳を初めて読んだとき、その視覚的な効果が生み出す一種不思議な雰囲気に眩惑されたものである。「おまえの脛にキスがしたい」といった直截な現代語訳では、あるいは下世話なものに化してしまう恐れがあり、この訳調の言葉使いからは、「イスラエル王女の凜とした気高さや妖艶さ、そしてつきはなすような冷たさまでが漂ってくる」と、井村氏は指摘する。同感である。ここからは明らかにヨハネとの「距離感や虚無感が余韻として響いて」くるからである。

知られるように、この日夏訳のサロメに大層惚れこんだのが三島由紀夫である。彼は自ら舞台監督と演出をつとめ、昭和三十五年に文学座で上演するばかりか、自分の一周忌追悼公演としてあらかじめ稽古を続け、自死の三か月後の四十六年にも舞台にのせている。三島が自分で選んで自分の所有物にした初めての本が『サロメ』であった。作家としての生涯の最初と最後の時にサロメを選んだのである。日夏の選択と全く同じだ。三島が日夏訳に多大な共感と親近感を覚えたのは当然の成り行きである。ことに本来レーゼドラマである日夏訳の独特な聴覚的魅力を発見する三島をめぐる回想をmajiedた文章は、著者が両者を直接知る、今では希少な生き証人であるためにまことに貴重である。その筆致からはのびのびといかにも楽しんで書いていることが伝わってくるとともに、これだけはぜひ後世に語り伝えておきたいとする井村氏の熱気と覚悟が感じられて迫力があり、感銘を受けた。妖精学やサロメ図像学とともに、本書は井村氏の代表作と言えるだろう。日夏耿之介の読者だけでなくワイルドに関心をもつ者にも見逃せない研究書である。